

鎮魂

川崎市麻生区 及川 昭

昨年の九月十一日のアメリカ同時集団テロ事件は、この二十一世紀が血なまぐさい百年になる危険を暗示している。最も恐るべきことは、ただ単純にテロが悪い、と決め付けることである。確かに一般人を巻き添えにする復讐など、許されるわけにはいかない。しかし今一番大切なことは、なぜこんなひどい事件が起ったのか、を明らかにすべきではないのか？ 一方的に善と悪とはつきり決めていいものなのか。最近アメリカでは「いい原爆とわるい原爆」とがある。広島長崎はいい原爆



今も残る旧日本軍機の残骸(レイテ島)

だ。それは三十万の日本人が死んで少なくとも百五十万の人類が救われたからだ」という議論がある。果してそういえるのか。昭和十九年十月二十五日、レイテ湾決戦の時、日本海軍は初めて神風特攻隊を派遣させた。同日、陸軍も同様にレイテ湾のアメリカ艦隊に突入した。私の兄及川陸軍中尉も、偵察機に二百五十キロの爆弾を抱えて特攻した。これを無謀だったと断言できるのか。すでにガン

シリーズ

沖繩戦を語り継ぐ(1)

沖繩戦を語り継ぐ会会長 高田 俊秀

昭和十九年十月十日、那覇市はアメリカ軍の無差別大空襲によって、軍需物資諸共に焼き尽くされ、差別的被害なし」として仕舞った。同日夕方のラジオは大本営発表として、

「……我が方の損害、強力に推進することが急務であろう。それが五十年前に大戦で散華した多くの人々に報いる唯一の道であり、それこそが『平和の灯』への第一歩ではあるまいか。」

この放送を聞いたとき、大本営発表なるものがこれ程欺瞞に満ち、いい加減なものであろうとは夢想だにせず、信じ込んでいた自分が情なく、無性に腹が立った。

この放送を聞いたとき、議論され討議は数時間に及んだ。会場となった将校集会所の近くで、草率作業の擬態で、周辺を警戒していた我々の耳に突然聞えたのは、大竹部隊長の太い声。「警報発令の要否は私が判断する。諸君に責任は負わさん。これは委任事項である。」



摩文仁岳にて遺族に当時の状況を説明する高田さん

会員からのメッセージ

この度塩川氏にさそわれて戦没者を慰霊し平和を守る会に参加させて頂いた。平和の灯発刊に当り父親から聞いていた戦争体験について語る。

親父は、大正十一年生まれ。太平洋戦争には当然参加している。陸軍伍長(衛生兵)であつたと聞いている。息子の私は昭和二十三年生まれ。親父はあまり戦争の話はしたがなかなか、私が小さい頃、テレビで戦争の場面を見ているとき、少しだけ自分の戦争体験を話してくれたいことを記憶している。その中でよく出てきた名前、地名が不思議と記憶に残っている。

親父の戦争体験

福岡県久留米市 矢野 佳 運

この度塩川氏にさそわれて戦没者を慰霊し平和を守る会に参加させて頂いた。平和の灯発刊に当り父親から聞いていた戦争体験について語る。

親父は、大正十一年生まれ。太平洋戦争には当然参加している。陸軍伍長(衛生兵)であつたと聞いている。息子の私は昭和二十三年生まれ。親父はあまり戦争の話はしたがなかなか、私が小さい頃、テレビで戦争の場面を見ているとき、少しだけ自分の戦争体験を話してくれたいことを記憶している。その中でよく出てきた名前、地名が不思議と記憶に残っている。



右が若かりしころの矢野氏の父親(旧満洲にて)

この作戦がいかにひどかったかを話してくれたと思うが、小さかった私には、当時判らなかつた。その悲惨さは、歴史が証明しており、又、多くの書物によって語られている。

ただ、今でも記憶に残っていることは、敵戦闘機から追われ、地面に伏せるとその横を機銃弾がピューピューと通っていき、爆弾が空から落ちてくる音、そしてインパールから撤退の悲惨さである。病氣と飢え、勿論食料もなくジャングルの中を撤退する恐怖話を話するときの親父の口調は、今も忘れられない。

「疲れ切つて横たわり、横にいる戦友が矢野一、矢野一と呼んでいるが、自分も疲れて全く動けず眠ってしまった。ふと目が覚め横を見ると死んでいた。その時のことは忘れられん。」

父の気持ちはどんなだったろうか。親父は昭和二十九年四月十三歳の時、脳梗塞で倒れ、体が不自由となり、平成九年七十五歳で亡くなった。このため、私が大きくなってからは親父の戦争体験についてはほとんど話を聞くことはなくなっていたが、亡くなる数年前だったか、「一度行ってみたい」と言ったことがある。どんな思いであつたのか、今となっては判らないが、きっと、元氣な頃から思っていたのではないだろうか。

親父は、福岡の連隊(甘木出身である)に入隊、旧満洲からシンガポール上陸。「烈部隊」として

この作戦がいかにひどかったかを話してくれたと思うが、小さかった私には、当時判らなかつた。その悲惨さは、歴史が証明しており、又、多くの書物によって語られている。

ただ、今でも記憶に残っていることは、敵戦闘機から追われ、地面に伏せるとその横を機銃弾がピューピューと通っていき、爆弾が空から落ちてくる音、そしてインパールから撤退の悲惨さである。病氣と飢え、勿論食料もなくジャングルの中を撤退する恐怖話を話するときの親父の口調は、今も忘れられない。

「疲れ切つて横たわり、横にいる戦友が矢野一、矢野一と呼んでいるが、自分も疲れて全く動けず眠ってしまった。ふと目が覚め横を見ると死んでいた。その時のことは忘れられん。」

父の気持ちはどんなだったろうか。親父は昭和二十九年四月十三歳の時、脳梗塞で倒れ、体が不自由となり、平成九年七十五歳で亡くなった。このため、私が大きくなってからは親父の戦争体験についてはほとんど話を聞くことはなくなっていたが、亡くなる数年前だったか、「一度行ってみたい」と言ったことがある。どんな思いであつたのか、今となっては判らないが、きっと、元氣な頃から思っていたのではないだろうか。



首里城跡にて 旧陸軍病院看護婦さん達と当時をしのぶ

平六・一〇・一〇記